

# 「読む」

仏教の視点から 名和達宣さん

親鸞仏教センター研究員

「読む」ことは、時に「自分自身よりも自分に近い」ものとの出会いをもたらす。

文字を「読む」ということ

経典のはじめに「如是我聞」とあるように、仏教とは単に説かれた教えではなく、それを確かに聞き取った人間により、言葉として遺されたものです。そして、国や時代を越え、今日にまで伝來したのは、数えきれない人々が、その遺された言葉を読んできたからにほかなりません。

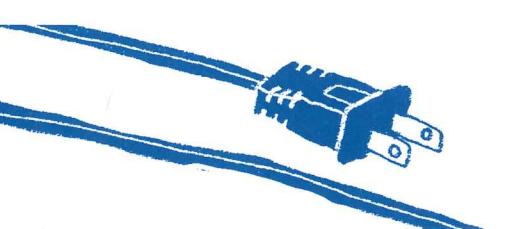
そもそも、経典を読むことは最も基本的な仏道修行の一つであり、「読誦」と呼ばれます。この場合、何よりも重要なのは、声に出て唱えることです。それは文字の表面を追うにとどまらず、自らの声をとおして言葉 자체にそなわる響き、あるいは根底に流れる願いを聞くことにはかなりま

せん。そのため、仏教において「読む」というのは、個人的な行為ではなく、深い観智の歴史に身をひたすことを意味するでしょう。

その一方で私たちは、いくら文字を読んでもわからない、何も聞こえてこないという事態に陥ります。フランスのシモーヌ・ヴェイユという哲学者は、聖書などに表された言葉（比喩や象徴）を真に理解するためには、それらを解釈しようとくわだてずに、「光が溢れ出でくるまで、じつと見つめ続けること」が必要だと言いました（『重力と恩寵』）。あせらずに、光が溢れ出るまで待ち続けなければならないと言うのですが、同時にそれは、言葉（神）の方からも待たれ続けていることを意味します。そして、ここでの「理解」とは、

決して頭に詰めこむことではなく、言葉をとおして自分自身を深く知ることを表します。

明治期を生きた仏教者の清沢満之は、文字面だけを読んで詰めこむような学び方は「死學」であって「活ける知識」は生み出さないと、同時代の仏教界に向けて批判を投げかけています。それに関連して『臘扇記』という書物のなかに興味深い言葉が書き残されています。そこでは、まず「文字言句」が「金線（伝導体）」に、「安心（信心）」が「電気」に譬えられます。そして、金線がなければ電気は伝搬されないけれども、電気が欠けていればその機能を果たすことができないと言われます。例えば、掃除機を使おうとしたときに、電源コードがなければ作動しませんが、そもそも電気



が流れていなければ、いくらコンセントに挿してもゴミを吸うことはできないというわけです。さらに清沢は、その発電源は自分自身ではなく、どこまでも「彼の不可思議の靈的勢用」、すなわち阿弥陀如来の本願力によらなければならぬと言います。そして、仏教が生きるか死ぬかは、この電気（信心）が流れるかどうかにかかるといふと喝破したのでした。

自分を「読む」ということ

書物を読んでいる時、ふと「これは私のことを言っているのではないか」と思わずにはいられないような言葉に遭遇することがあります。宗教哲学者の西谷啓治は、学生時代に西田幾多郎の「思索と体験」を読んだことで、一生の方向が決定づけられたと述懐しています。西田の言葉から「自分自身よりも自分に近い」ものを感じ取ったと言

うのです。ここで想起される一言があります。親鸞聖人七百五十九回御遠忌の年（2011年）に、真宗大谷派の関係学校である九州大谷短期大学が「愚禿（ぼんがり）本願に帰す」という音楽劇を公演しました。その際、縁あって制作に携わった方々とお会いする機会を得ました。題名が表すとおり、親鸞聖人の生涯を描いた劇ですので、台詞には『歎異抄』をはじめとする聖人の言葉がふんだんに盛り込まれていました。この点について、脚本を手がけたある教員にたずねてみると、「今はわからぬた時に、迷わず、劇のクライマックスで語られる「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案すれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり」（『歎異抄』）という言葉を紹介してくれたのです。さらに、その理由をきいてみると、「最初の頃は、『親鸞』という人はこういうことを言つたんだ」ぐらいにしか思つていなかつたのが、いつのまにか、これは「私一人のため」という言葉なんだと感じるようになった」と言わされました。つまり、台詞を繰り返し読みあげるなかで、その奥底にある大いなる願いをも聞き取ったというのです。

「私一人のため」と言い切れるような言葉との出会いは、深い願いの歴史のなかに自分を見いだすことにはかなりません。それは、自分を「読む」とでも称すべき出来事です。「読む」ことは、時に「自分自身よりも自分に近い」ものとの出会いをもたらすのです。

なわ たつのり  
1980年兵庫県姫路市生まれ。大阪大学文学部（倫理学）卒業。大谷大学大学院修士課程（真宗学）修了。現在、親鸞仏教センター研究員。真宗大谷派山陽教区明泉寺衆徒。主な論文に、「清沢満之を「一貫する」思想」（『現代と親鸞』）、「西田哲学と親鸞教学」（西田哲学会年報）などがある。

「読む」ことの大いなる願い。  
弥陀の五劫思惟の願をよくよく案すれば、  
自分がためなりけり。